

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 アカガレイ

学名 *Hippoglossoides dubius*

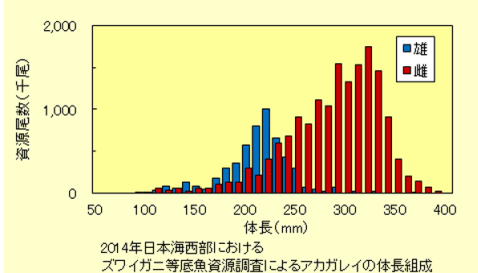
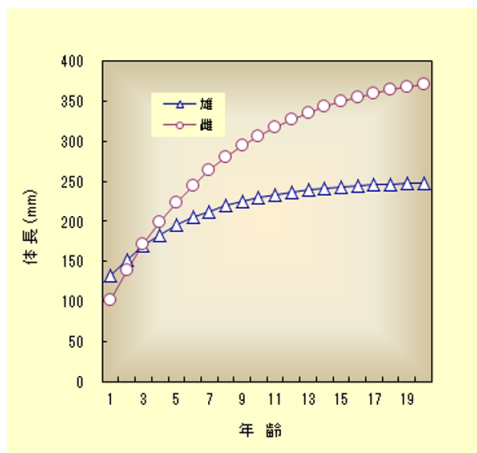
系群名 日本海系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 20歳
成熟開始年齢: 京都府沖での調査では、50%成熟体長は雌25cm、雄17cm
産卵期・産卵場: 2～4月に水深180～200mで産卵、主な産卵場は粟島北方、若狭湾内、経ヶ岬周辺および赤崎沖を中心とする隠岐諸島周辺
索餌期・索餌場: 周年、分布域全体(水深150～900m)
食性: クモヒトデ類を周年捕食するが、オキアミ類やホタルイカモドキ類などのマイクロネクトンが増えると、それらを選択的に捕食
捕食者: マダラが幼稚魚を捕食していることがあるが、成魚の捕食者は不明である

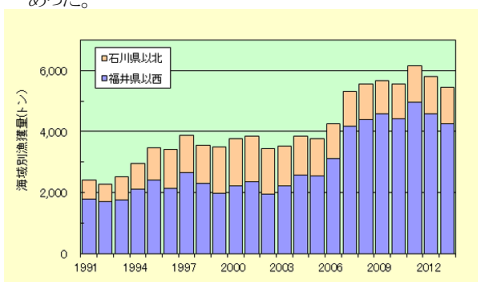


漁業の特徴

日本海のアカガレイの9割以上が底びき網で漁獲され、その他は僅かに刺網で漁獲される。府県別農林水産統計値のある1991年以降では、沖合底びき網の1そうびき(以下、沖合底びき網と呼ぶ)が全体の4～6割を占めており、鳥取県、兵庫県、福井県、石川県の漁獲量が多い

漁獲の動向

沖合底びき網の漁獲量は、1980年代後半に減少して1992年に1,405トンと最低値となった後、増加に転じた。総漁獲量も1990年代前半から増加して2000年ごろは3,500トン程度で推移し、2005年前後にさらに顕著に増加した。2008～2010年は5,500トン前後、2011年は近年最多の6,158トンとなった。その後2年減少し、2013年は5,454トンであった。



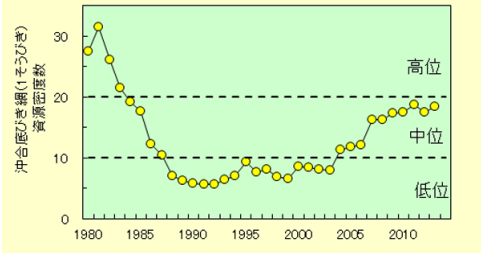
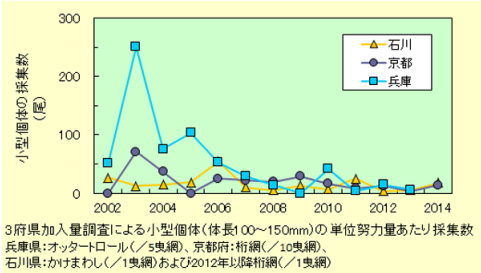
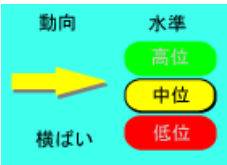
資源評価法

日本海全域における沖合底びき網の漁獲成績報告書から求めた資源密度指数から資源水準と動向を判断した。さらに、ズワイガニ等底魚資源調査(5～6月)結果から資源動向および加入状況を、新規加入量調査(石川県、京都府および兵庫県)から卓越年級の出現状況を考察した。水準の判断には沖合底びき網の資源密度指数を用い、過去の最高値30を三等分し、10を低位と中位の境とし、20を中位と高位の境とした。

資源状態

アカガレイの資源密度指数は、卓越年級群(2001年級群)が漁獲加入した2004年から10以上となり、2008年以降、2013年も含め、16.3～18.7で推移している。水準は中位と判断した。直近5年では、2011年が18.7で最も高く、2012

年は主体となる年級は2001年卓越年級ではなくなったが、2007～2010年と同等で推移している。2013年は18.3を示した。直近5年の変動は小さく、横ばい傾向であった。調査船調査の結果でも2013年までは加入が比較的良好だと推察された。しかし、2014年調査結果では、漁獲加入が低下した可能性がある上、依然として新たな卓越年級は確認できていない。



管理方策

資源水準は中位であり、動向は横ばいであった。2014年の調査船調査の結果では、漁獲加入が低下した可能性がある上、依然として新たな卓越年級は確認できていない。本種は長寿命であり過度に漁獲が高まることのないよう配慮を続けながら、資源を有効利用するべきである。ABCは、規則2-1)によって算定した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	49百トン	$0.9 \cdot C_{2013} \cdot 0.99$	—	—
ABCtarget	39百トン	$0.8 \cdot 0.9 \cdot C_{2013} \cdot 0.99$	—	—

- 十トンの位を四捨五入
- ABC算定規則2-1)に基づき、ABCは $ABClimit = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABCtarget = ABClimit \cdot \alpha$ で計算した($\alpha : 0.8$)
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bとは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である

資源評価のまとめ

- 資源の水準は中位、動向は横ばいである
- 2012年の主体は卓越年級(2001年級)ではなくなったが、資源密度指数は2007～2010年と同等
- 2014年調査結果では、漁獲加入が低下した可能性がある上、依然として新たな卓越年級は確認できていない

管理方策のまとめ

- アカガレイは長寿命であるため、過度に漁獲が高まることのないよう配慮を続け、資源の有効利用をはかるべき
- 日本海西部では、改良網の普及が継続的に進んでいる
- 平成14年からの「資源回復計画」に引き続き、平成24年からは「資源管理指針・計画」を実施中

執筆者: 藤原邦浩・上田祐司

資源評価は毎年更新されます。